岷江入楚

幻

特別
へ 12
4604
40

712
4604
40

宮内省図書寮

幻

五十二冊　巻五冊

春宮兵部卿宮参六条院御事
六条院思往事御事
中納言局中将局後御前事
中将君為巻上御形見事
二月朔前紅梅盛事
匂宮参二条院御花御事
六条院渡入道宮御方御事
若宮与若君遊御事
夕方後明石御方御物語事
明日光源氏御方事
四月一日同花散里歌更衣所裳末事
参日与中将君賜巻子事
五月十四日右大将君後御前御事
六月見池蓮御事

小汀文庫

48 3709

七夕詠歌多市
八月十五日紫上因忌供養極楽曼陀羅市
中将君扇ニ書付市
九月見菊綿付市
十月時雨元ニ居ル源氏市
十一月五節日大将君ヲ以中将殿人サ侍ハ赤六条院市
破旧反古ハ紙市
冬暮六条院紅葉遠赤懐ニ書付市
佛名市

花ヲ以テ居名

花ノ宴ノ次ノ年源氏五十二ノ時ノ春也ケリ巻ノ四月
御法ノ次ノ年源氏五十二ノ時ノ春也ケリ巻ノ四月
より十二月まで月々ごとに巻ノ名ハいまし
あるべき巻々ハ六条院の恋歌の事日ニ月ニ忘
れ難ク紫上を思ひ出ル事ハ源
氏四十八のときなれば
巻名ハ
巻名ハ源氏ノ十二年の四月より十二月まで
巻ノ名を次第ニ紫上の病ノ次第ニ死ル
ようを思ひ出ル事ハ日ニ月ニ
巻ノ四季を次て紫上の病ノ次第ニ死ル
ようを思ひ出ル事ハ日ニ月ニ
義世巻年中十二ヶ月を具ス歌ハ御法の
巻ノ四季を次て紫上の病ノ次第ニ死ル
ようを思ひ出ル事ハ日ニ月ニ
所詮歌の事ハ巻ノ四時の移ニ随テ
幻ハ眩メクルヤウ此字ニ通スト云ヘリ

春の光を見給ふにつけても
百ものゝ
春ハ
花
春の光ハ
さいはゝ
じにハ
御法
人よりハ
無常
うらやましく
源のかつ
なりて
源氏
ほとゝぎす
なく
蛙
蛙日記ニ八日にひてのゆ
とのゝしとハ
みるゝ
じしぱく
花
木及川ニ
つまもけ
うゝ
そのゝ
まきれ
源の

たまのあるひさけつ
けの字清酒あるあり濁てよむ時ハ次の月をもて川
さらなる清てよむ時ハ川邊ゝ毒院芸丁用ゝ

なりなき御ゝ
源のたまい申て女ゝ
いつり
所ゝあるつまりけの市
中ゝ所ゝ
月よりたをゝ
女三宮のたまへ
紫上のたまへり
あふ道ゝ
道ハ大ゝの風流
まあやをゝ
ゝ女三宮ゝ

入ゝ女のゝ紙ゝ
ゝ女三の御市ハ
ゝ
ゝ毒院

[illegible]つけ 源のみかのもとにまいりて
曹司しもいたりしも
[illegible]へなり
[illegible] 暇のしもあるそらて
[illegible]うき世よゆきてえなんと[illegible]ひて[illegible]のかなをかくるあ
[illegible]うき世にゆきかねなんときくるに[illegible]のかたにもきる[illegible]
[illegible] 世の中[illegible]ふあきね[illegible]山の[illegible]の[illegible]に[illegible]ゆれる[illegible]
りきえなんと[illegible]とりをせくりもえなんともきゆるし
同仏
[illegible]
[illegible]きふ[illegible]源[illegible]をそんと[illegible]せて人めをたく
りてうらもあるらし
[illegible]いの[illegible]
[illegible]
御いとけ
同火桶
かくてしいてくるしりけるせを

源の世をそるひるとをうきもあ
れさへうらもそ[illegible]
[illegible]う人[illegible]のうへをかなしと
[illegible]う心[illegible]
なをそりの心[illegible]
袖の[illegible]
[illegible]川[illegible]
[illegible]寿川
この世をつけていあるをあきをし
[illegible]源氏の[illegible]
源の組
御法華経の[illegible]
源の[illegible]
心をみをてあきをあるをけ
佛[illegible]
[illegible]常をさ[illegible]
同捉

めなしひ人このはつよそ
秘 こふらう人とや
箋 同なる人とや御かたをき人とや
御めでたしのこひひくへし給ふよ海られをやそこかゝれ漁を
私拭卻千行更万行灑のもりをかくぬる詩あり
おもへてにハおもしろふし
中納言君中ねる君すてん
中ねのまんそてうらうハまきちのさくなり
む 中ねる君ハ二条のあたりまさしかさなりし時よりぞ
うてまうや六条院のしろひとく人々えひしとも
中将君ゆへ人にちとなりて院のめせもさらりち
川かさらしを二条の上うせ給ひて後ある人をふ
みよおもひゐるつかまたなり
ふとめおもしろり
紫上の中ねる君を称人比よ覚しめしたて源
のときれとおもハふなけるよハあてなるなふ

うかひたまおもしろふれと
弁 文選句中将を紫上のをかへにいひ墳上の松をなき
人のうへにふるふにたとへなり
秘 む 花ゑるよみゆりなきへのうへよなへらしや
河海よかやくひれ河出志けしく論語をより
てゐ給へし文選よ馬鬣松とうまてうるひ松とも
みゆりる鬣ハ馬のやまのしくさまそてあるよに
川さらゐるをなをやそのはたに生つる松をうるひ松
とゐつるならへハ川の松をなき人のうへのよみかへるうとく
中ねる君を紫上のかへるにたとへいをさなるらしめやそ
くゆへ人の此をさたひよおもしろなるといへるなり
河 文選曰馬鬣松青薐
礼記曰檀弓孔子之喪有自燕来観者舎於子夏子
夏曰聖人之葬人与人之葬聖人也子何観焉昔者夫子言
之曰吾見封之若堂者矣（封築為壟形四方而高）見若覆夏屋
者矣（覆謂茨也夏屋今之門廡也其形旁廣而卑）見若斧者矣（斧形旁殺刃上而長）従若斧

者孔子以為丹上雖登技又易為功 馬鬣封之謂也 俗間名
本朝文粹 廿二 菅贈太相國詩書巨勢為時作
馬鬣年深蒼烟之松雖老龍光露晞荒沼之草再
新太平御覽云周景或庐山記曰石門巖即松林也
南臨石門洞中俯視之離〻駢麈尾號為麈尾松
西嶺異態如馬鬣又葉五粒者名五粒松
豫章記曰徐孺子墓在郡南時杜守徐与於墓辺
種松 童賢碑
廣別先賢傳曰項琦至孝母喪独立墳歷年乃就
居喪踰制種松柏成行
鬣 廣韵云毛長也 良涉切
又常陸國風土記 香島郡内童子女松原云々
水原抄云大國小人の墓のたてまつる小松をなづけ
うるなりとぞ人皆又尚つきなまれひとし
くなりてそたてる松を馬鬣松と号もうしこの

此松をるのうちにかくれ人をうけ日にしら
ぬもきたりなり之ほ世とのかけをさきまねの
君ぬひしをうしれてしてたてしとあるれ者けす後成て雖成なりと
東〻世上申れ君しけりをさなにれ
うしうしうしうしうれ松と号をいつ
れ松と号するもそれとわりをそてうしうれ
らしとしてしけらにれ文選乃うれ松の訓
ハ小的なり不審あるへ礼記に丹雘
墓のうしうしうしうしうれ先ハ丹雘墳
をうしれ松をうしうしるのなれハ其ならしる
のもうしうしれを似れを歌文章男女髮
髮或ハ髮髮をうしうきてうしうしうしうハい
まうし小松の今の丹冷後墓上者松を
なき人のうしうしうしうしにけ中

[illegible]とのうつりみれば[illegible]なり世の中
おもかた

ときくに[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
和人不見〻應笑　白氏文集

人よりもうつりゆくものハ
人よりもうつりゆくものハ
[illegible]なれ

頌

[illegible]ほとてなん
世界の月えん

[illegible]やうのうきなかりもとハ[illegible]きよのめにかゝ
見ト雲トハ本和光ノ[illegible]

かくのうりしなるやうよ
[illegible]陽抵へ[illegible]し平生よりうりうる事
源氏の[illegible]生よりうりうる事

なんてのあのと

[illegible]源の[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]源の[illegible]
川はいの[illegible]
きさいの[illegible]
[illegible]

三家なと
白[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]との遺[illegible]
[illegible]
源の[illegible]
きされなれハ

二月ようつり

かの[illegible]
[illegible]
[illegible]
うらひものうやひ　聲華　朗詠下

源氏 さても花のおもしろき宿にて見ればそきめでし人を
河 こちらは句はおこせよ梅花あるじなしとて春な忘れそ
秘 営るは花のあるじの数く来ずはいろくへりしをとや けり
よく人々ふみまそは二条院まそのあるじや
弁 二条院也 此巻より六条院なるべしとぞ
此の花の主は二条院也といふは六条院也 私云 御説の
梅をも其の御しにといふにしさがなくてはあるや 当弁
秘 春ふかくなりゆきに
それより六条院のいとなみ也
三月ようつまりより見るらり
朱雀への花さかりにはよつかぬを
六条院の春にはなるべし
めてふたるには西の殿も
花をも源の貪着はなかりし筆のまゝにみそそ
この世のかみぬやうに
秘 源の心なり

弁 源氏の心ある人の殊にしきゝこしさらんとは又内よりの山なと
河 いつやまとかなめや
河 よふなの顔しきこゝねおも山桜ふかき心を人はまったく
かもけちはひらきを
河 朱桜 和名 樺櫻
秘 かくまうさなきくつきてうへなきなるせ
そのひとくしとき花の心を
弁 又六条院の主と定めす
よろづまろうさへはさおよびその
弁 三宮の御幼稚の心二条六条共にありし二条院に
御わりめす
秘 此語まで二条院あると見え 河 おりてそれとこの六条院
の花をもさしてを御見えとや 又は六条院二条院乃分
別なくて其の御幼稚の心なりへきにや
木のめぐりに一帳をそへかけてかぜにて風も見え吹
よし〳〵 也

共慈日照芳雄駐　仍張惟幕亲陰涼　文集
唐穆宗每宮中花開以童頂張蒙被欄檻置惜
花　同
唐御史掌之号曰拓香　と東三宮の芳りしも
なるに芳ふるの御ものあり穆宗の抜花御史をけるにと
なるに芳ふるの御ものあるの人の寄意なり
芳ふるの御ものあり人より
大　同
大そに芳ふるの御ものあるるきすをいり付木丁をて
川　同
川与日芳ふるあるるきすをいり付木丁をて
めるを屋きすをいりとをきすなれいしこう
いりとをしーのるを
寒　秘
寒なれきそんすも
こ　秘
こ家よりもりて陽道のるきすなりるり
いのりとふ紙いまして
ゆるいのりいまを志るくあるも世をそむき
ゆるいのりいまを志るくあるも世をそむき
ゆるい対面のあるを
ゆるきと三家よりるを

ゆるきと芳ふて
こ　秘
こ家の色　異
そ　秘
そ乃そまひーすを
芳　秘
芳上のるをやうに又源氏のうをくなると
のるをいまくるとを平
ゆるくう　同
枉　日本紀
禍
御ざの神をひきさるなるて
三　異
三家の源氏の御神をひきまさるるを又三家
の　秘
のるを御神まやや
御　秘
御ねの神をそも又源のをそもを
をるのまれからんるなるるて
源の氏さゆを
御るるの色の
いまさるるの居るる芳脈の人を
きいの色のひなるも

深脈しる人も
多くの人々も花やかなる多をいきぬ
るりの山なをしもしろいまつはなれとともにやりて
もしんをそそりつもり
平清の西園をきゝ多くも志の淺深よりて心喪の
脈に用ゐる

平清の西園

我人云書脈に二朝中二度差しに六業院參上ノ
時已に美脈の侍り何ゝ有て是を問まゐ
乗し差脈の淺深に志の厚薄ありしに
是の脈を一生忘れ難し　立く異朝の諸武程
嬰の脈を三年まで是しに官位の事なれ
然欲切なるふりてこれを是しに行ても何の事
あるべしや　物忌今日本妻嬌子生妻や　脈三年日脈
一年子不生尚妻脈九日脈三月に入る妻の侍そ
三月の脈に次年の差ゝ多の山多

此なれとみくり又こにも同く多ふ多つよ
と尼くり　妻女の西園に凶脈なりしに官宿老
大臣なるに差や此院しもるまそら被差しに家の
差脈なりてこと侍にやはしして差き侍
紫上八七八月にかれ多の山多なり源氏の君なる書の脈を
侍に差しなるも三ヶ月なるに侍る年
の春まそしもんの山なれなきなるに解裏に
迎るきにりてまつの山なれもあや
なりき紛そて平清を
延喜の山仏の御あうきをもきなるも重明親王に
てしに三年乃月に侍る一春乃脈をのそき
差に食黒し朱漆なるの衣裳に後冠表を
えりに侍るの志に法のかの木に
冊報く
ひこりそあるやこんなきの人の山なるを差にうきまを
紫上の山なるめて未三の山なもえるひし本を四方の

世をのがれ侍りしやうそんといふ
入道殿の北の方の御
二条院その御方にまゐ
給ひ侍りしとき
とあり二条院より六条院
さぶらひ給ひ侍りしとぞ
ものがたり侍りし
句宮
二条院より六条院
宮かけの御方へ
女三宮
源氏物語絵巻
六条院
女三宮
源氏物語絵巻
御法
御法
かくれ給ひ
源氏物語絵巻
二条院より六条院
参りいたしたる
御法
御法
源氏物語絵巻
花の夕べ
時花を佛の供養に奉り給ふ
春に伝ふ
紫上
春の山
花の宴
紫上
うへ人なき春
うへてみしかきやの梅も
色も香も
源氏物語絵巻
花用後方
うつり人の
菅原
菅原
女三宮
いつつの源氏
光るきみ
女三宮

平
さまでそこちの言葉伝ふるさけなりと
あるこの所てしをなんしと
朝
れいつまてし紫上の本をひいてふなり一方
そこふるたふと云しに本のみしも 和歌或アラ
とてそこちの本と云そこ口ちの手習なる
といつらと行るし
平
紫の上の本を云出ふ
しふ本なくてやとうひしと
れ
さはそこちしの物ひすと廿三宮ハ上方を早
下しての本ふと物ひ
なりと院ハ物ひ
物ひてこそ
物ひつこに
なりしに本を云出ふ
まりの行りかの物を
紫上の心つひのそこ
と云いそしふ海也

又こさ海のハあて
朝
又紫上を云出ふ
平
紫上の本を云出ふ
私明石を物へき人と物
のありて行をれこうつ
こそハのこやに物
ひんと物ひしこそ
行なりし廿三宮ハ物
の本をこつて
人をあれと云ん
朝
こより海乃流
れ
れこ院のあつの上
大この世こつけて方のいこ
れ
方のこ人こつひし物を
朝
こ海へこちひ一本
こちし

いのちをもうしなひて行くへ
方へまかりたるもあり是はのがれいでんとおもふ
間八ゝ
さて日ごろのうらみにやうに
世上のものゝ日ごろのやうに行かうと
源氏の伝世上の木のこなれとさいしものゝ行ゝ
ぬゝ
いとゆうみをさつまらく
ぬんとの伝聞ゝ
大ゝの人々ようにはうれ行きなき人々に
ぬんとの返答ゝ
大ゝの人々に
世上の人々の
第
五界のものゝの人をそれゝ分除しすまてる
きせてきて
きていそゝ
源氏の事なゝ

ふうにあさましう
第
卒分の御ゝ伝いにて
こゝもあさきゝなゝ
第
銃 遅 銃の伝ゝ
六条院世ゝ
ゝの世人ゝ
ゝやるゝゝの間ゝ伝ゝ
伝ゝ人ゝ
ものゝ
ゝゝ
第
中宮御
乱のゝ
御方の

はかなくもすてし世のふくふかり
姉院は仏さめはして世中をもとむる念仏なる
は雨に係て世に住るる仏もなへしそは世のおは
たえたえつらんや
おもひやる迷ほてしそ　句
世のうりとなき時就りおへけや　そとしめて上を定よ
いにしへのうめしうらそ
花仏はおとりやまして又さめやときしおも花なるたし花山
院の御事をみきり遍昭なとの歎はまれなるをや
ふかりとふあし
ことにさふめり
それはれよりさうそ　世を恨る在原仏のりといとすゑ
春ふ人をわれてすさのわれりに遁世をとするは入れ
られ末よくなぬおもしふるやうにれとらくく仏し
何らにはさめてして在仏わたとそはみのまこにとなる
まさも花山院定は承徴殿の女御子の売たりしわれ

ぶ母御てかし住なきり花山をいとせ御しうとも
後ふいうきせまくして世御てあすやなからぬむらま
いよもありしや在仏はおとりやまくてさめやうき
のなりそし
おもりしおりしのとめ
思推なへき事とも
あさりうきも
今上の君かしや
うこきみるへきさ
御即位ありてとも
何れ中宮殿のおんれ住もつきのふつきあ
よまそ心のとえん
源の朝　花
こきさむのあ
前中もせ　花
春雲三月の前

なかりしと云し
河 深草の野への桜し心あらはことしはかりは墨染にさけ
秘 義 因りて
それは大后の世よつけて
秘 いひまつりしかも也
二月ころより なきしかしか云
薄雲の巻なりく宮つき出へうれは尺おくりへ
ての子也
秘 大殿の御かたへ 心はへある類也
いくあまた人よわかれて
秘 紫上の事也 花
御中のうすさ
秘 いのちの中なり
たまゆき 引とり
幼かりし御こうやうし老ありまで別てし
見捨られつるかなしさ也

なくなよの
義 夜ひとよさなけめて 宮人そ人の御心ちあつめ
つる御身のうしや
かくそしかしはつきぬると
秘 さてによりかなつきまゆと也
女しりの事は人よ
秘 けしの字 気晩して云て 深き心あり 因みの書地
こうれ心よし
弁 源氏の心
なくしも思ひかしつれかりのあいたくし例年のことよならぬよ
秘 唐 ものによりてり三月の末なれ思也 弁
河 なきもあはれるこころのしそうつ乳まつりし唐よ帰んや 京隙
因 唐のことよ我渡ゞ奏しし云は扇よよせうる也
ここよ扇よよせうり
む 人の御ありさまいつあし きこゆりしと
大かたしの御かた ゆへかとなりて 尚中に 御方

へうり紛けり市をいひしきかたかたに云くめしさま
翁鳥のうみハ次になりて御うあにあらはしをみし
御うらしと

秘

明たん上の翁鳥をハ付しをみて源の子けき紛ける
しく持ちると

五明たん上
カ
秘

かりうぬし苗代水のさしよりうつり花の付をしたにみて
源を房に付しうるや源のしとハ花かもめて後ハさうとを翁鳥
を挽し仏その花らんもうさらとぞ又ノ第ハ世上の
後ハ源の御新作もうらみのるをまにしても

花

らハ翁と房のぬしとせ仏やりう子せもりの挽を擬か
秋のちたりかし明そ行るやけり下人のまうつてやす
たのむのうりの文つきに源氏君をうらく出てまつりて苗
代水のさしよりうつりし花の付をとるハ明たん上
しも移すし似仏になりて花らん仏もまきといつるも
かりうくうりしすうつきけよとハおしのよそかあ
かかね紛や

第

源を房に付て　一第世上の後にハ源の新作をとゝめたるとも

安

私苗代水を世をようらく房を源にうつして世上なく
秘後やしより源をしときんや源を花と房をはにうと
へうくみとかく掛まそうつりしとさやうつりとハてハ明
花のうく源の裁うときんもやおのうりと房ハ源
のゆり何れぞ

安

花ありしめきわ仏とすノ

秘

なか源あさましき翁より
初ハ世上おりしの上をハめよ源しき翁に仏ときうれ

一ノかわし苗代水のさしより
英句付寄ノと花を源にうつしたり一首其うち
よ二文字うつくしろ仏ゆゑやうや一ノかねしとハ
母家白家をして世の挽しいそうしたおりので渉ん
苗代水に世をうく挽に源をうつくし千しさて仏ハ
世の移り源をなハ源の内新挽てうとなといつうれ

へつり紅の市でなきしきゝとゝなるに人く御しさよ
親方のうみハ次になりて術ゝあるゝなるゝをなりし
物うらしや

艶 明ん上の親方をハけしをそれて源のゝけを紀をゝる
しく林ゝゝ

五ゝん上 カ
艶 かりつねし当代ゝのゝゝしよりうつりし花のけゝゝにみそ
源を房にけしゝゝや源のとハ花かもめて流ハさうらと親方
も林すしゝそ花ゑんもゝさうらと又ノ第ハ紫上の
後ハ源の術新をもらゝ市のゝきてや

花 ゝい羽も房のぬしとゝ人やりゝゝもりの故や桜方
秋のゝたりかし吟そ何ゝやけりゝ人のよりつてやする
なのむのりの又ゝゝに源氏君をゝくゝまつりて当
代ゝのゝとしよりうつりし花のけをゝぬハ明ん上
も林すし比ゝになりて花ゑん人もゝきといつるや
ゝりゝくらしゝゝくきはまとハあしのよをゝゝあ
ゝゝ紀や

第 源を房に比そ　一第紫上の後にハ源の新をとゝぬとや

安 私当代ゝを紫上にゝく房を源にゝくへて紫上なく
ゝ後やしより源もしきんや源を花と房とにゝと
へゝゝと云ゝにそうつりしとゝや ゝつゝしハて八明
石のゝく源の契うときゝゝやあのうゝと房ハ源
の御ゝ礼ゝゝ

安 花かしめるぬ人々とゝゝノ
なゝゝあさましき翁なり

艶 初ハ紫上あはしの上をハめゝ御しき物にゝをきゝなれ
しや

末の世ゝハゝゝみよ人ゝせをゝしゝ
紫上しあはしやゝそ人をゝしれとちゝそてゝおり
よりしとや

又さりとてひらゝゝにゝさとゝるれ

花 あはしの上をハ流の人やときゝゝにいうちゝゝのとゝれ
しゝも又一つうにおしけを人わきゝくゝゝし此を

きてを堂といひし紙はなほもとせ人と堂と
なのまを
人はかてもみらるきき
人はたてらさらしほのうくたてもとせ花
乃紙いと
源ひかり君を紙しとも
うたくまうらかのあきはりく
そもゆ名上の御ろへはうくきはりをはやうにけく
たつすとふなりもも
あるてしのふゆへなりやもなりくとはをとりを
しきみのはいすしとも
なつの御ろより
なようしてけを花也四月よりをしを先也
長雨
なしろもをうへてけるゆをすをはやをね
花
花のへをたにつをてふはいをの名しちろう
紙及市はきまりをはをやをねとある也

紙
ふはうとはきふとをふをもふをきをしをを仏
七堂とやうの長堂を調しのゆ御長つを
て心牛のつきとをもやをはをとはをを
矣
きふはうとはふ紙のをやをふはよふきをしすを
ぬをとも堂上のゆ仏長堂を調しうに付て
ををつき御をもやをとはをあすはあ
らしのをを五きをとはををうくはをを
しを紙はふやうのすをを堂上のましく
うるはのやうにをうして五くをみ紙のはめを
うをを付てしを牛をへきをとはうに口を
紙及をふはをすをれをはふ牛とふをあて
をあり
私抄の事紙
長慶
をうをのうをきにうををはうををの世をいををき
をうををの世はをすをきをせをり羽花のうをきはのを
をうををなのをを人花ををあて

秘 図
三界へ付てよき付句清様の事や
前程の世ハりをいへり増答よくつけてこそ
ふかしのひてそこみおしきよの付
秘
深の仁恵ある也
くれなゐのきざしこそ
む
紅の色菩提のそひたるや
秘
林子冬や脈若の色の冬也
弁
紫上よ合しふくて脈の冬へつたるや
火ざうしろの事へ
花
萱草冬ハ脈若の用る冬や中ね君の言葉乃脈
なきさるや言葉の脈をハ一碁の同きたるや
いれとやこのあしそ言れ冬れ
む
蓑ハあふ日や中ね君よた付送付句
秘 図
筆とはいへる也
あつ日　人よ逢事をいへり
中ね君
さもそハ天人の水よみなぬめ合ふかきしよあさ人気する

河 秘
此もそハ天人のるに剣まめ筆し蓑を言ふ手しやハ
天人の水の中河海よくうつくしきなさる
け前ハ天人のあまりの色也登の日なりにありて神枝よ
中をせていへり中ね君ハ紫上をよ人にして三ふ
仍しや三年よめるといし紫上まし海にきてたり
なしるひたる也言れハ蓑のさましふきもつれ冬深
あつひと云事をハ言れるひぬる也
第
上句契り第や下句ハ深の言ろ形ろ事をかのめ
つきすなりけれ
奥
二乃公あり川前河海むしの人を言ろ色ろ流りし
言れハ神社のあいの水草のもぬね中しとちら比
そ其人の七絶なくありてよの水まも入谷のかたり
しゆをいへり
一条天人ハぬなりや　中ねハ紫上をたよりにしてこそに
さるれしをみ草のねとよき天人ハりされハ蓑のゝ
さしるきも言逢ふりとなり此筆ふもしき

花鳥類聚抄未定使公蔘ニ無縁也
祇云中将御息所といへるをあまたの説ニ分れたれとも
も成候ハしよろつの事のよミ方の事ハよろつハたよ
りよくミ方のよミ方ハあまたゝるにや定ところせさして後ハ宗
の心しの心をもむ入られぬ故よ万さへ口ずさんといへり
なけきの心ゆるし定家卿僻案もよろつの水乃
事なかり
花
清輔抄よろつの事ハ詩歌ニ非所よそ詩ニ入てあり
をふさき八定家卿ハ説ハよろつハ猶そたとりの事非詩よ
りきうへりと　今ハ其よろつ人事ニ多をそてらそく
つてつゝきたし　けよろつ人ありしきらし　僻案抄よのを
よれ候り但源氏哥加茂祭の日なれハ非詩の哥
へしかなる御へきや紫式部の心いうとおもひけるを
しかれ家のうたの心ハよろつの事ハ一葉の心よ
ゆく人候りこ今ハ物かハ新しくう色よさにもし
らへのうたしの哥をハ云へ是紛ゆへに其ふれさへをや

同
是かれのかしきあるを
けよろつの家ハ事の違多ゝにかしあり或ハ加茂祭一説ニ
うたきて云々或又金佐もしらと云々八雲御抄なり
し詩歌ハ万よみ云々
或意作者詩哥合よ詩歌月を清輔卿下　詠く
月影ハよそにうつし紫式部やよろつの水よつらくおきてそ
判者俊成卿へて云よろつの事と云事ハ源氏物語よりそ
加茂祭の日哥にさもそいよろつの事にみえ侍れハ
ところ候や何て八古哥を見及候ハ　ける物おもふく
其ほかよろつの詩ハそも候しあらし角詩御哥
の月よハ海の面涼をみつさ須の洲より出けれハ
押きてよろつの事ハかりに向て月おきらにやりとふ
人歌いつくと云々
清輔朝臣陳云よろつの事をハいつ迄の詩をも俗に
或又云つたあの水ハ源氏のころハあれハ和泉式部か
集ニハ御覧人をさりけつゝや云々　和泉式部か集云

稲荷祭りとて[illegible]なる車のちまきなどを入
てとりてまきを車にうゐまいらせしとき人のふのサ将
殿人のかねいのりとすまを一日祭みるとて車
の前をまるる花ゆかりてうり入させし
いるふしいつるとすまきをふるひの祭にはまる

返

何ゆゑとなき人ゆゑ
とひとれてそくくやうかみをてうきやう
弁けて考ふあるふ祭さいうへよ源ゆゑとゆゑ
けう寺を神平物る所眠源氏寺という後成ての戸
まれうふ源氏をさんうきうやう
神中物ふいうへの水という所物ゆ流ゆ
所眠云うへのゆとふ祭物ふあをきいうに流れ
源ゆゆゆ物ゆとうふ祭ふふうと法
祭ふうり読宣ふふ祭人のゆふうて[illegible]
ふきうとみをふし弁のつゆて物ゆ物ゆ物れ

うへのゆとふふけあのゆふ弁のゆり物て神
ゆゆのふつゆふふきゆのゆにゆり源ゆ
又物つゆおうり源ゆとふゆ日ゆ又寿ゆとゆて
ふゆうとあり弁のうゆふにゆて百寿ゆ弁
後物ふするゆきとふ寿わり
古寿ゆ
弁ゆふのゆうにふうあ水のゆゆゆふそいゆをゆふ
ゆうとのうり入くふうゆのゆ天水のゆ
真義物ゆ弁物ふ弁物ふ瓶ゆきて真ゆうゆをきゆ
ゆふいうゆ物ふ弁ゆうゆ真ゆゆゆゆゆ乃
物ゆうとふ今ふわりとふ
大ふふふふゆふふふ世ゆ真ゆもゆゆふゆゆふゆゆゆゆ
源氏の寿ゆふふふふふとふう中ゆ真ふふうに
ふふうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
橘と罷ふの仏わり　自西ふ橘買ゆ
下白橘ふふゆゆり

秘 中納言ひとりは御ふしもえふさぬまゝにけるさまそしとも
思ひを摘よるせり
さみれいけるおもてくるしきに
ありしよりつれり
時鳥をふくして待まなりけし
十三日の月
兵 十四五日の比とも
今世話ならうちしきをみんと思ひておもふ
河 冬のぬ前後よりれいきにて今世をならさるおもきに見ゆ
弁 同河海　時鳥を待や
秘 義同河ゝ
時鳥のなくおとをまつこそ今世話なるなれ
いとゝ赤や
またくに立出るもまち給ふ此
ありあけのきれなる御影おほにみるやうなる雲気
様なりし

まくらうく心ちすと
河 耿ゝ残灯背壁影　蕭ゝ暗雨打窓声　文集
秘 義同河ゝ
秋の夜の閨にはうらみし吹風となりて耿ゝ残灯や
うらみし中にもの雨にそひて蕭ゝ暗雨之二句を
さみしきものくるしきなかなり　義 上ノ詞ニ灯影も吹風となりてト有灯ノ事を云也符合アリ
いもうとこそねよげなるにせまほしき
河 独してきくはわきける時鳥はなほなつかしや
弁 同河海　秘 義同河ゝ
秘 世上よき事のうへにはとも多勢の色也 弁
む そしも源氏の御心をなぐさめになつれていつり下乃
詞よりふかきといふはいかうの心につきこまか也
ひとりもみへとたるる赤うれは
秘 源の詞
弁 うにくらきおもて
大かたむかひてのくらきねもとも

仏ちかひ給ふなり

源の御ものがたり

大元八年ばかりの人の行方をやおぼつかなくるあるべし

けうの始てくや

此仏ちかひ給ふ夕雲の仏事

かくのごとくまされてハ

夕雲の仏

夕雲の仏ハ源氏なるべ

かのごとく御おもひ

大ぬのものがたり

野分のまきの事

ひかるきみとかのかたりあはせたもやうく

夕雲の御八月の因忌もちくつくらん

八月の忌

八月の一因忌ちかくなる云花ちる七月ニ入ハ

ちかくなりぬるとなん

源氏の御

ものがたりの事おほかたハ別に普通にてこそ

ものがたりハせしかとも

かのごとくしたがひて極楽曼陀羅寺

白氏文集云繡西方慎賢 并序 空私云廿廿三又有弥陀賛

弘農郡君姓楊号蓮花姓殺弘願拾浄財

弘陀佛像及本國土眷属一部奉為故李氏長

婦楊夫人滅宿殃追冥福 諸曰

金方刹 金色身 貴重力 福闇魂 造者誰

弘農君 受者誰 楊夫人

當麻寺極楽曼陀羅縁起云右大臣藤原豊成号中将姫豊

成女歟誰職土之志不殘放求浄土之望是深重夜憲慕

極楽依正二報憲慕渴仰之餘手自書写梅讃浄土経三

一千卷不顧禁中之交遊逐肖人間之栄耀為氏五尼受如

来戒天平寶字七年六月十五日殺一切誓願一食長斎奉修

[illegible]

源の御[illegible]

大文八年[illegible]人の行[illegible]

[illegible]

此[illegible]夕秀の[illegible]

かくの[illegible]

夕秀の[illegible]

夕秀の[illegible]源氏[illegible]

[illegible]

大[illegible]

野[illegible]

[illegible]

夕秀の[illegible]八月の[illegible]

八月の忌

八月の一[illegible]忌[illegible]云[illegible]七月[illegible]

[illegible]

源氏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

極楽曼陀羅寺

白氏文集云繡西方[illegible]賛 并序 空私云才[illegible]又有弥陀賛

有女弟子弘農郡君姓楊号蓮花姓殷弘願拾浄財

繡西方阿弥陀佛像及本國土眷属一部奉為故李氏長

姉楊夫人滅宿殃追冥福 諸曰

金方剋　金色身　貫垂力　福闍魂　造者誰

弘農君　受者誰　楊夫人

當麻寺極楽曼陀羅縁起云右大臣藤原豊成号中将姫豊

成女歌離穢土之志不残欣求浄土之望是深畫夜憑慕

極楽依正二報憑慕渴仰之餘手自書写梅讃浄土経之

一千巻不顧禁中之交遊遂肖人間之栄耀為氏立尼受如

来戒天平寶字七年六月十五日殺一切誓願一食長斎奉[illegible]

當麻寺我不見生身阿弥陀如来者永不出世寺怨念
無貳稱名不退也信心切〻故感應是不空繞經五ヶ日月
廿日一化尼来曰欲見生身弥陀者可調設蓮莖百駄許言畢
去是故申下宣旨於近国募年貢設蓮莖同廿三日化
尼又来伴端厳女人其齢三十許也化尼化女取蓮莖縁糸去
寺乾六町許乃至化人今堀彼清浄之地霊水忽涌出浸蓮糸於
其水染為五色化人即以五色蓮糸廿三日夜自貢刻至寅刻
織極楽曼陀羅織之間寺乾角有織機之音因化尼手教
心禅尼相對変化女織出曼陀羅置両人前縣之奉礼極
示変相也其分量高一丈三尺廣一丈三尺三寸也化女放光
明入雲西去化尼暫留教変相之功能於禅尼權化
之間導因法銘肝 文畧抄
移示のまゝ女人のもとあり故和漢の之瑞あり
仏菩薩とし化尼とし化女とし
經文もあり
れも菩薩のしわれらう

かの行基のいんよりひて
秘 はしめ
やうのまとりをしるまを菩薩といふくして
秘 多聞の幼曼陀羅をもつて
はまを行基やきはれとよ
みきりて世をすくはんとおもふ
平 菩薩仏法をのまを勢なきそうしまを
れとトとをみきりて世をすくはんとおもふ一法のやうに
ふをつくり
第上のはをにたのをのをのをすを
秘 れはりをあをひ 事 第上ようきはいをるにし仏をはまくなし
源の幼菩薩ようきはいをるにし仏をはまくなし
源の我力をつくの宿世をうきと
うこにそとひをを行をあ
多聞のはをりをあをの行をり

河 手を高門寺ん
多聞大長ノ日
長多七

ことのしとハいふとも
紫上のゆかりを見出し給ふハ御仏のまもらせ給ふ事かなといへハ
ましてさのミえのなむおもふや
いたはりてこそ
河 いにしへのことゝ人ハ何事もいたはりそなる念仏師
川竹いにしへのとし其人の詞にいふも乃しらひい
てのたしとつきたる好也 弁 深の万満荘厳の仏
いつもやり給いとおもかしの手向也
此川竹言語道断也上の句によりて本ハいつさう
ものゝ釣にそめつるは トアリ いたはりてこそと云かゝり不知竹
と一向各別也奇妙也とく也
浪 なき人をしのふる心の月日にぬれてやすらふ山家かな
こゝろならぬきさらきのあはれなるこゝろなかるべし
兼 はらからに見捨てゆかん春の花後ハしのひてさうらふと
弁 なき人のやとにはなれて何事のうけて其身のたよりそなたを
竹の音の川にて好也 とも弁

松 見るも紫上をそいふなり 女房のそばをのみ見也
たかきし世ハ
松 紫上の在世をいふ也
いとあつきころ 秘言也
いけのはちすそれさかりなる
河 時移事去楽尽悲来毎春之日冬之夜池蓮
夏開宮槐秋落 長恨歌伝
弁 河海ニ時移事去ノ一句ハ蓮ノ事ハかゝる出処ノ仏
ヨリ相当ニ依テ引之也
いたはりなると
河 そもしらぬ心ゆきうしはなれぬ人の身にいたはりなる縁なるらん
ひ 河海の川竹にハ不相当也 法照禅師五会讃云
一池中華尽法界ニ似タリ往生人此仏のよりなり
いろなきうつきや
秘 花まつの葉をむすひつゝし 第同
弁 蓮の字をあらためていたはりなりとなして出したるハ妙也 花まつ五会讃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風の吹きたるこそ
なほ行末まで
けうのなしわり
はてて春の日の月日と
人の為しうし世を今までにかくしつゝ世にそゝろ
秘　第四月
御　四日は八つ
四日と四十九日をいとなみ仏事の
日々とも　齋　食
秘　過ぎて四日と四十九日をいとはゝ閑居なるべし
第四月
なの御だるひは御てうり
なのだるひは初秋や　待乗たこ　御手水
中略
なるまゝ
なるまゝ
秋方のはるまきよのつきをあはれとそもとあつまり
秋のきりのあれそまきはなるまゝ
たゝ行秋

人
秋方はまよなりはけはのうるはなり
秋方はまよなりるに流はのうるはなり
方を庶ものきつけるをとて御ちんしてはのくゝ
きをへのもの
第　世故市丁勘
秘
もるもの
わるまて
なるもの
もるもの
もるもの
も

[illegible]

[illegible]て幻術を[illegible]

[illegible]幻術者[illegible]

[illegible]

[illegible]

かのぬてなる
紫上の歌
[illegible]
[illegible]
[illegible]

英ムシ佛名経ハ
広厳印千仏
賢劫印千仏
宿印千仏
三千ナリ

佛名経記　並礼一切十方三世諸佛三塗苦患國
豊民安ヲ　以上第秘

ヒヤクシヤクノシルシクナリ
錫杖経曰　錫杖亦名智杖彰顕聖智也又徳行切
徳ヲ故也
佛名経曰　後夜御導師着礼盤唱佛名畢錫
杖　又第三夜錫杖後蔵人受取出侍出綿被於
導師手ヨリ僧ヲ第ヲ戒
杖ヲ忘ルヲ
杖
仏名の事師の源氏のり来たれり
佛のきゝ給ふ事ハ
源のやそ御世をそもしたるとかたる
あうしのまつりとはるとかたる
禁中御佛名第二夜被着柏梨第三夜内礼堂
酒者暮顔ヲ第
禁中仏名の第二夜ハ柏梨の勅色とかたる　あり昔

右近中将和気真以橘律師柏梨庭宰花近府官
人の酒料よりてとりて孔子の夜花近府よ
て勅色のまつりを第
ヒロクシヤクノ給ヒ
延喜十九年仏名導師宇佐律師賜御所古女
天暦四年佛名導師浄蓮三礼之間自簾中
給御衣第
ヒロクシヤクノ
白頭夜礼佛名経のしるし畢
朝
朝永ヲ
朝
ヒロクシヤクノ命しをそ宮のうちに多くの物を給ふ
朝
多つゝ御ひろこと
ほとやとゝはれてをそ
四ヒロクシヤクノ
世の長ヒロクシヤクの
源氏を流して物語をいとなむ

三条大臣集延喜十九年十二月十九日四の山佛ゐの
御座所にて中将けい師とりて侍りしの歌ども
けうよめしいくされて侍きるを賀してはてしてと
きつれけるついでに奏しけり
雪のうち出のあさにて中将にてはてきいるをいらりしり
四位こゑの山の奇を雪積の所にて
あちきの表をみてそうさにたるやまうん山のしゆき
貫く集屏風の奇仏座のうちに仏
わつまりて雪積をてあそはけ所打とこ所うとて
あつ花と雪ふりうち打る梅をみる
梅をもとしもゆくへあり川の山の雪とまかゆるあ
その日にそ力所つ
けれいこと所五月くしけふりめてとさ海りそ
ものうなり平家
ワうきの
句ものうき

なやうゐよれ〳〵たうあつきあ
爆行驚陣鬼駆儺聚小鬼 東坡
追儺儀 禁中
玄一刻左右近衛陣 郎 開美明門 不開長乗 儺人 土茶
陰陽師奠参讀呪文畢方相先作儺声次々撃
楯如此三反群臣相応和呼追々侍臣相分殿内并四方
駆逐之威方相入自仏華門経所殿出自北廂畢 閉禁門
内蔵寮儺木振鼓おとなる刻限殿上の男女房
ちらち所いてうう動揺わり 委見紀家賀美注
蔵寮花を為融院のうへ
こちりのたいるをりてうてうれいり
けうし所
物ゝとるる月日とてなにに年もワせしやわかめ
物ゝとるる月日とてなにに年もワせしやわかめ
敦忠卿の上白とそ用こ
上白敦忠卿同左卿をもなして用をしんん

はいくらのかずのひろくとみきてさ扨
紀みちち大臣のはひさそ物〳〵のろくと
しるしをうせるまきてとそ
六条院あれのかれと年世をさりはくさ名
とは扨擬されけるん
図 これハ光年のかずてをあてゝ
秘 院のあれ今年ハりなりそとそ用とあ
第 第